

3. まとめ

I. 回答者の属性について

- ・本調査の回答者については、女性の回答が男性よりも多くなっており、年齢については、「71歳以上」が16.0%最も多く、次いで「61～65歳」が14.5%、「66～70歳」が10.5%と回答者全体の約4割（41.0%）が61歳以上となっている。
- ・居住地区については、「馴柴小学校区」が17.0%で最も多く、次いで「八原小学校区」で13.9%、「龍ヶ崎小学校区」で10.4%、「久保台小学校区」で8.7%、「馴馬台小学校区」で8.3%となっている。
- ・居住年数については、「20年以上」が59.8%と最も多く、次いで「10年以上20年未満」が23.4%、「5年以上10年未満」が8.0%と、居住年数の長い市民の回答が多くなっており、居住歴が10年以上の人が回答者全体の8割（83.2%）を占めている。
- ・従前地については、「茨城県内（龍ヶ崎市以外）」が28.8%と最も多く、次いで「ずっと龍ヶ崎市」が22.4%、「千葉県」が16.5%となっており、回答者全体の7割（76.3%）が龍ヶ崎市以外からの転入者となっている。

II. 市全体の印象について

- ・龍ヶ崎市の住み心地やまちへの愛着については、前回調査（平成22年）に比べ、住みよいと感じている人は8.9ポイント、まちへの愛着では2.2ポイント高くなっている。また、龍ヶ崎市の良いところ、好きなどころでは「豊かな自然がある」「災害の危険性が少ない」「買い物などの日常生活が便利である」などが上位に挙げられており、こうした豊かな自然環境や生活環境の良さが住み心地や愛着につながっていると考えられる。その一方で、龍ヶ崎市のもの足りないところ・嫌いなどころでは「交通の便が悪い」「活気とにぎわいがない」「将来の発展が期待できない」「都市としての個性や特徴がない」などが上位に挙げられており、今後も継続して対応していく必要がある。
- ・龍ヶ崎市への定住意向については、住み続けたいという人が平成17年度の調査以降約8割でほぼ横ばいで推移しており、今回調査では、前回調査（平成22年度）に比べ、1.4ポイント高くなっている。龍ヶ崎市の魅力については、魅力あるまちになってきたと感じる人は約3割（30.8%）となっており、平成17年度調査以降で減少してきていたが、今回調査では2.1ポイント高くなっている。
- ・市全体の印象については、評価が低い（足りないところ・嫌いなどころ）項目に対する取り組みを進めていくとともに、評価が高い項目である豊かな自然環境や、地域の安全性、日常生活での利便性など生活環境の維持・より一層の向上を図ることで、龍ヶ崎市としての魅力や愛着を高めていき、市民が住み続けたい、市外の人々が龍ヶ崎市に住みたいと思える環境づくりを進めていく必要がある。

III. 龍ヶ崎市での暮らしについて

- ・龍ヶ崎市での暮らしにおいて、不満度の高い項目は「鉄道やバスなど公共交通機関の利便性」「商店街の活性化など商業の振興」「見どころ・楽しみどころの発掘など観光の振興」「路上駐車や放置自転車対策」「街並みの美しさ」となっており、前回調査（平成22年度）と比べ、「街並みの美しさ」が新たに上位に挙げられている。また、今後、優先的・重点的に取り組むべき項目では「鉄道やバスなどの公共交通機関の利便性」「病院や医院の数と夜間・休日などの医療サービス体制」「お年寄りが生活しやすい施設・サービス」「台風や地震など自然災害への対策」「犯罪や非行防止などの治安対策」等が上位に挙げられている。
- ・今回調査で得られた各項目に対する満足度や不満度、優先度・重点度を踏まえながら、施策や事業等を展開していく必要がある。

- ・現在の暮らしのなかでの不安については、前回調査（平成 22 年）と同様、「自分の老後・将来」が第 1 位となっており、次いで「自分や家族の健康」「安定した収入の確保」となっている。その一方で「水害や地震などの自然災害」が前回よりも 8.5 ポイント高くなっており、東日本大震災をはじめとして近年、多発している自然災害等に対する不安が高まってきているものであると考えられる。

IV. 龍ヶ崎市のまちづくりについて

- ・これからの龍ヶ崎市のまちづくりについては「みんなが元気に暮らせる医療体制や福祉サービスが充実したまち」「災害に強く、犯罪が少ない安心・安全なまち」「交通や買い物環境などが充実した生活に便利なまち」など、これからの少子・高齢化に対応したまちづくりや市民が日常生活を営んでいく上で重要な生活環境の整ったまちづくりが期待されている。
- ・龍ヶ崎市の今後の土地利用のあり方については、「新たな土地利用策を考えるべきであるや企業の進出意向に応じて考えていくべきである」と捉えている人が約 8 割を占めている。

V. その他、個別の課題について

1. まちのイメージについて

- ・龍ヶ崎で思い浮かぶものについては、「撞舞」が最も多く、次いで「田舎」「コロケ」「田んぼ」の順となっており、本市の有する伝統行事や豊かな自然環境などが挙げられており、こうした環境の保存・保全を図りながら、本市の持つ資源として積極的に活用していく必要がある。
- ・龍ヶ崎市を色で例えたときに思う浮かぶものについては、「緑色・黄緑色」が最も高く、次いで「青色・水色」「紫色」が上位に挙げられており、市の有する森林や緑地等に代表される緑環境、牛久沼や市内を流れる河川等に代表される水辺環境などの豊かな自然環境が本市のイメージカラーにつながっていると思われる。

2. 市役所からの情報発信について

- ・市役所からの情報発信については、7 割を超える人が必要とする情報は得られており、そのうちの 4 割を超える人が広報の記事やレイアウトには満足と感じている。その一方で不満と感じる理由では、必要な情報が探しづらいとする人が多くなっている。
- ・市公式サイト（ホームページ）については、「見ない」とする人が約 5 割を占めており、内容についての満足度が無回答となっている人が多くなっている。
- ・市役所からの情報発信では、主に広報龍ヶ崎「りゅうほー」を通じて必要な情報を得ることから、より分かりやすい広報紙づくりを進めていくことが望まれているほか、市民の身近な情報収集・発信ルーツとしてのホームページの利用向上に取り組んでいく必要がある。
- ・政策情報誌「未来へ」については、知らない人が 5 割を占めている。

3. 市民との協働（連携・協力）について

- ・市民との協働のまちづくりの取り組みについて、協働によるまちづくりが進められていると感じている人が約3割を占めている一方で、わからないとする人が約4割となっており、誰もが気軽にまちづくりに参加できる環境づくりを進めていくとともに、行政との役割分担を明確にし、市民と行政との協働のまちづくりに取り組んでいくことが求められている。
- ・毎日の生活における仕事と生活の調和の実現について、実現できていると感じている人は4割を占めている。

4. 流通経済大学との連携事業（龍・流連携事業）について

- ・龍・流連携事業については市民の連携事業に対する認知度や参加状況は低かったものの、龍・流連携事業での施設の開放、講師の派遣や教育環境の充実に向けた支援、公開講座等への参加についての関心は高いことから、参加に向けた情報提供・発信等の強化を図っていく必要がある。

5. 文化財について

- ・龍ヶ崎市における文化財（指定文化財以外）については、牛久沼や小貝川、蛇沼などの水辺のほか、神社の祭礼、関東鉄道を走った蒸気機関車が上位に挙げられている。
- ・今回得られた結果を踏まえ、これまでに龍ヶ崎市で培ってきた自然環境や歴史的な資源の保存・保全を図っていくとともに、情報発信等を積極的に展開していく必要がある。

6. 喫煙について

- ・現在の喫煙については、吸っていない人が8割以上を占めている。また、受動禁煙については7割を超える人が理解している一方で、約2割の人が理解不足となっていることから、健康づくり等と連携を図りながら、意識の向上を図っていく必要がある。

7. 墓地について

- ・将来における墓地の取得については、約5割が既に所有している一方で、約2割が新たに取得したいと考えている。また取得したいと考えている人の取得に向けた優先事項については、「取得や維持の軽費が安価である」「なるべく自宅から近い場所にある」「宗教宗派を問わない霊園墓地である」ことが主に望まれている。